七月作品

☆七月特別作品☆

昼隠居

小島　ゆかり　東京

喉を病む友小声にてはなすときとほくの丘に野茨の咲く
古びたる鳥獣図鑑亡きちちに似るふくろふがまたわれを見る
ふくろふは「昼隠居（ひるかくろふ）」の説あるを知ればまひるのまなぶた重し
大きすぎるうぐひすの声におどろけり樹木混みあふ武蔵野の路地
葱坊主葱坊主わたし葱坊主しめやかに春の雨がちかづく

過去世めく

田宮　朋子　新潟

ひとしきり春雨ふりて大欅ほそき千手の枝はうるほふ
夜桜の咲き満ちてゐる枝越しに純金いろの三日月ひかる
戸の外は民話の里の春めきてうぐひす娘なまりつつ鳴く
六十代ふたり七十代ふたり湯宿につどふはらから四人
十年まへの歌誌をひらけば過去世めくかの人この人亡き母もゐて

☆

月集スバル

古都の伽藍

橘　芳圀　新潟

千年の古都のあしたに続く朝春の雨おと聞きつつ目覚む
神仏が幻想ならば千年の古都の伽藍はおほきなうつろ
一灯園訪ひしすがしさ春の水きらめく疎水のほとりを帰る
「またきてやー」叔母のこゑする嵐山墓にまうでて帰るわが背に
そこにゐるとは思はねどゐると思ひそこにゐる人の墓に詣でる

樟の花

小田部　雅子　静岡

わが知らぬ祖母（おほば）病みたる喘息の木枯しが鳴るわが喉に鳴る
薔薇の香のうすらぐまひるふたつみつ耳をくすぐる花虻のこゑ
風なくてペネロペイアが散りそめぬ死者の心に入りゆくやうに
牧之原南なだりのひとところ人影あまた手摘みはじまる
樟の花こんもり咲きて雨のち晴れ島田工高午後の静謐

☆

水島晴子　兵庫

土を抜きくるしむやうな楠の根のあひまにひとつ蒲公英ともる
音立てて蛇口に水ははしるとも「それでいいよ」のこゑ聞こえこず
惜しみなくみどりの枝を差し伸べる木下にひくしすみれ、たんぽぽ
あのやうに小(ちさ)く咲いてと笑むひとよ芝の間に濃きすみれの色よ
黄砂降るまにまに咲(ひら)き藤房のおぼろおぼろにむらさき翳る

武田弘之　神奈川

有り余るキックバックの全額をなぜ寄付せぬか被災地能登へ
外遊を好む総理よ約したる拉致問題の解決は何時
空き家なるお隣さんの庭隅に紅き牡丹花ほつこりと咲く
役所内巡り巡りて説きゆけど空き家問題処理する課なし
上人の御文に悖り百歳を目指すわたしは救はれざらん

高野公彦　千葉

乗り越して一夜さまよひし長津田の街のしづけさ、優しき暗さ
人生の端(はし)行くごとき日々なれど歌あり歌は心のまほろば
頭蓋骨といづれ呼ばるる凹凸を掌(て)もて撫でをり穏(おだ)しき凹凸
晩酌中浮かびし歌よそのメモを翌朝(よくあさ)苦笑して読み捨てつ
人生を振返るとき見ゆる灯(ひ)の特に大きな明かり、柊二師

奥村晃作＊　東京

若者が希望持ち日々働ける暮せる日々がかつては在った
なけなしの庶民のカネを召し上げる巧妙な仕組あれこれと作り
大企業の便宜計ってカネ貰い癒着極まる自民政権
長時間労働にコキ使われて若者の暮らしに寸のユトリなし
若者が希望持ち日々働ける暮せる社会に変えねばならぬ

森重香代子　山口

八十余歳けふこの瞬(とき)を生きてをり庭に一粒さくらが含(ふふ)む
雷鳴の過ぎたる庭にほのぼのと庭のさくらの雫してをり
雨雫はげしく飛ばし去りゆけり庭のさくらに籠もりゐし禽
山禽を庭に眺めてひとり棲み昨日も今日も声を洩らさず
目薬を差してしばらく天井を見上げてをりつ何思ふなく

影山一男　千葉

あああれが三途の川かと歌ひにし先生よまだその川見えず
三陸も福島も雨能登も雨東京も雨　列島は雨
広辞苑になければグーグル頼みつつ選歌してをり春立つゆふべ
毎日を上京しつつ勤めけり婚後四十年湾岸に住み
マンションの桜並木も老いに入り或るは伐られて空間を生む

桑原正紀　東京

箸を止めうつとりと目を泳がせて喉ごしの歓あぢはふ男
渋面をふと緩ませて咀嚼する松重豊の表情や佳き
テレ東の製作費安くおもしろい番組のひとつ「孤独のグルメ」
テレ東の〈金が無ければ知恵を出す〉制作スタッフ素晴らしきかな
平和なる笑ひ求めて火曜日は「開運！なんでも鑑定団」視る

最貧の老人なれど東京都無料パスには関心あらず
上天気好まぬらしく鳩らみな飛ばずあるかず何処かに隠る
春雨ぢや鳩はよろこび駅近きビル屋上の傾斜につどふ
道端のだいぶを占めて見事なり木香薔薇の盛り上がる黄
入りには色いろいろなつつじ咲かせ努力してゐる町ナカ医院

狩野一男　東京

「鳥居原湖畔庭園」散策す満開に咲けるさくらたたへて
「鳥居原湖畔庭園」のうへの空青々として雲ひとつなし
まとふごと桜の樹が吹く桃色よその彼方にて照れる太陽
ひと木ひと木さくらいろなるさくらたちひとつもあらず他のいろの木は
宮ヶ瀬湖水茫々とたたへたり宮ヶ瀬ダムが塞きてたたへて

宮里信輝　神奈川

縷のごとく歌詠みつづけ縷のなかに〈をみな〉ゐること秘かにうれし
〈女子供〉は死語となりしか蔑されし日も守られし日もはるかなれ
菜の花は日ごとに伸びて黄の頭花ふくらみゆけり少年のごと
孫の世にもしや戦と憂ふれば「ビリーブ」うたふ若きらのこゑ
まんかいの茱萸の花蜜吸ふメジロけさも来てをりさはの実成らむ

木畑紀子　京都

ランドセルきらめく小学一年生花咲き鳥鳴き樹々が唄へる
白光る豪華客船入港す横浜港に開く花びら
波を打つ妻のからだの青海にひとりさ迷ふ白鳥か吾
まつ暗な宇宙の空に抱かれてわれは銀河の花と開かむ
子や母を吹き殺したる爆風は誰にも言へぬ被爆の無惨

島田暉　神奈川

お願いとちょっとお願いありまして、後ろめたいの〈めたい〉は目痛い？
にんげんの三本指がつまむためではない蒂のあるあんぽ柿
吉川さん吉川さんと呼ぶなかに吉川線があるなら他殺
キャラメリーミルクコーヒーフラペチーノ！　娘のために勇気をもって
アンジュクで一夜過ごし、音読のさなかのむすめたのしかりけり

大松達知＊　東京

上野駅地上ホームは人気なくぽつねんとある啄木の歌碑
小菅駅は〈拘置所前〉駅鉄橋をとどろかし来て「けごん」が通過す
重量級電気機関車「ブルーサンダー」コンテナ貨車を牽きて西下す
半世紀へて八高線に乗る男むかし〈撮り鉄〉いま〈乗り鉄〉
晴れた日は湘南カラーの帯のある電車に乗つて海を見に行く

津金規雄　神奈川

人知れず咲ける深山の同胞を羨みをらむ名所のさくら
失ひし時に還れる道ならし前にうしろにさくら散る道
もも色のゴム消しのかすねずみ色春のをはりはなぜなぜかなし
湧き上がる読経にほとと椿落つ二十三世大和尚の通夜
名を付けし和尚の棺見送れり〈青竜寺枝垂れ〉花ゆらしつつ

小山富紀子　京都

あさつゆのわが身ぬちなる明かり窓翳る日多く冬百日すぐ
美意識のかたまりガクトあな妖しテレビで唄ふ彼を見てゐる
まだ五十なのに終活してるらしい沖縄の海に散骨きめて
明日のこと分らねばいまを楽しまむお笑ひ児玉のライヴにも行つて
みづくきの「あと寝る」ラジオ聞きながら長湯してゐる充電のとき

清水正子　神奈川

小嶋一郎　佐賀

寝るまへのくすり一錠飲み忘れそれでも眠る午前五時まで
春眠は暁覚ゆ新聞の届きたる音今朝も聞こえて
路沿ひの石にさやかに照る日射し分けて貰ふと手の平を当つ
上向きに写る癖あること思ひ顎を引くなり孫のカメラに
横浜へ引越され独り咲き続くこの家のバラ採る人もなし

福士りか　青森

二度わらしと言ふことなかれ父はいま重き荷物を下ろしたところ
父がこぼし私がこぼし猫がこぼすこんな夕餉も楽しからずや
ロダン作「考える人」をポータブルトイレに貼ればなかなかよろし
さくら咲く四月のなかば時がはやく進みすぎると父は戸惑ふ
さくら茶をポットにいれて徒歩一分車椅子五分の公園にゆく

藤野早苗　福岡

早朝の電話は母のホームより下の義歯（いれば）のゆく方知れず
「わたしより先に死ぬな」と九十二死を寄せつけぬ笑顔で言へり
上出来と着付けを終へてぽんと押す背中よ娘の卒業の朝
一之輔好きだつたひと　あなたならおそらくここで爆笑したね
裏庭に生るイチジクとちがふのかトスカーナ産イチジクの味

風間博夫　千葉

遠きとほき落ち葉焚きの火芋くべて見つめてゐたつけ落ち葉焚きの火
ティーバッグ三十秒ほど湯に浸しながら五回振り「おーいお茶」飲む
「掃き手」とは負けのふるまひ掃くやうに力士の指が土俵に触れる
使はない朝ありません妻からの贈り物なるヘヤーブラシを
われの頭（づ）のカーブ保ちて擦り減りぬヘヤーブラシの毛がすりへりぬ

田中愛子　埼玉

杖をつく友と離れずわたくしも朝のでんしやに席をゆづらる
ぼんなうが歌にかかはることならばよしと思はん　はつなつの風
「おどろいたね」解説しつつ言ひしといふ中原めいじん悪手に対し
珈琲を飲み終へ友に言ひたしよスタバの陰で待つてゐました
月の夜はひそかに光（て）りてゐるならん人住まぬ家の柱の指紋

高野公彦評論集　令和6年3月刊　二八〇〇円（税別）送料三〇〇円
歌の魅力の源泉を汲む　コスモス叢書第1235篇　柊書房
著者住所　〒272-0114　千葉県市川市塩焼二―二―二―五〇六

大松達知歌集　令和6年1月刊　二五〇〇円（税別）送料三〇〇円
ばんじろう　コスモス叢書第1233篇　六花書林
連絡先　〒170-0005　東京都豊島区南大塚三―二四―一〇　マリノホームズ1A　六花書林

奥村晃作歌集　令和5年12月刊　二六〇〇円（税別）送料三〇〇円
蜘蛛の歌　コスモス叢書第1232篇　六花書林
著者住所　〒175-0092　東京都板橋区赤塚七―一五―一六

水上　比呂美　東京

地下駅のエレベーターの箱の中人をらず床に花片みつよつ
甘皮の赤きマニキュア拭きのこりああやだしだらない女のやうで
体重は二十歳のころと変はらねど腕太くなる七十二歳
黄砂(くわうさ)には「牢獄」の意があるといふ恐ろしからむ黄の砂の檻
雨に濡れたる菜園の黒土がふくらかに見ゆ種をしまひて

鈴木　竹志　愛知

この人もあの人ももうゐない古き「コスモス」頁を繰れば
会員数三千人を超えし頃「コスモス」はただただ文字が並べり
目を凝らし頁を埋める小さき文字読みとりゆけば嗚呼「生の証明」
読みゆけば一首一首が立ち上がり「コスモス」はまさに「宇宙」となれり
一冊に一万首は載る「コスモス」柊二はその何倍の歌を読みしか

原賀　瓔子　東京

ヴァルターは子の家の犬、冬の午後初めてリード持ちて散歩す
見かけたら記(き)してその日に覚えます灯台の歌、蜃気楼の句
ノーブルは高貴とすこしちがふなりノーブルなまま夫人老いたる
忌日表みたいだなつて子がわらふ厨につるすわれの暦を
五年前まで羊飼ひだつたひと河崎秋子直木賞受く

水上　芙季　神奈川

花びらの色味が空に移つたやう吾子と公園でふらここに揺る
一年前はお腹にゐたねかうやつて一緒に見たかつたのこの桜
桜見ずスマホ掲げる花人を首せはしなく赤児は見をり
飼育ケージに桜三本離れ立ちそれぞれ昼寝のしまうまがゐる
抱き上げて群青のベビーカーのうへ桜はなびらにまいさんまい

大野　英子　福岡

いつぽんのソメイヨシノが咲いてゐるいまだ染まらぬ白さを保ち
軍国の花なりし日は遠い過去と思へど湧ききてぬぐへぬ不安
咲き初めのつつじの垣のなかで鳴く鳴くのが仕事の鶯の雄
餌をやるヒトがゐるから群がつて待つてる港の鳶よ堕ちたな
春の雲低くかかれる丘の上のしだれ桜の花重く垂る

松尾　祥子　東京

冬が過ぎ春が過ぎてもこぎつねのこーんけんけんわが喉に棲む
寝室も居間もいまだに蛍光灯九十五歳が紐を引くため
烏賊の内臓(わた)ぬるりぬきたり生きるため命いただくこの闇浮提
「いただきます」合掌の手の美しき五歳児　清く育ちゆくべし
この世にはゐないだれかれ棲むからだ若葉の風に吹かれつつゆく

鈴木　千登世　山口

禊月夢見月また桜月みやび男のこゑ思ふ三月
水平に風を切りつつ光りつつ天つ女の初つばめ来ぬ
上流にダム湖を抱き厚東川きらめきゆらぎ海へと流る
酒造場事務所にあれば二俣瀬旧村役場に杉玉にほふ
あぎとへる鯉は光の粒を呑みきらりとその身水にくぐらす

小島なお＊東京

沈み込むプレートみたい霧みたい三十五年かける借金
「亡くなられた場合」に光る雑居ビル団体信用生命保険
ふさがったピアスの穴を耳たぶに探る手つきで、春を二人で
外せなくなった指輪と眠る友地蔵のなかへ桜は散って
七十二歳になってお金を返し終え桜を窓のように見ていた

斉藤　梢　宮城

今日かぎりの悲しみは無し　玉ねぎをみぢん切りして涙を流す
風に風かぶさりて吹くこの夕はバンドネオンのリベルタンゴを
一行の詩のやうな歌ばかり読み不機嫌になる桜の夜は
さくらへとみなさくらへと歩みゆく一つの春を分けあふやうに
散りたての桜はなびら優しくてわれは記憶の春へと帰る

うたを味わう―食べ物の歌　◉高野公彦

七月の味

―土用のウナギ―

これまでに吾に食はれし鰻（うなぎ）らは仏となりてかがよふらむか　斎藤　茂吉

新幹線の駅のホームでときどき鰻弁当を買う。値段はだいたい千円前後である。ついでに缶ビールも買う。新幹線に乗り、ひるどきが近づくと、弁当をひらき、ビールを飲みながら、鰻を食う。楽しいひとときである。鰻弁当は、あまり当たり外れがない。鰻には、天然モノと養殖モノがあって、むろん弁当の鰻は、安い養殖モノだろう。私はそれで別に不満はない。

斎藤茂吉は、鰻好きで有名な人であった。右の歌は、今までに食べた多数の鰻を思い出しているのだろう。殺生を悔いているのか、それとも、鰻に感謝しているのか、よく分からないが、「仏となりてかがよふらむか」は、とぼけた言い方で面白い。歌集『小園』より。

石麻呂にわれ物申す夏痩せに良しといふものぞ鰻取り召せ　大伴家持

このように、万葉集の頃から日本人は鰻を食べていたようだ。現在「土用の丑の日」というのがあって、その日は特によく食べる。私は〈皆がすることは自分もする〉という考え方がイヤだから、丑の日を避けて鰻を食べる。

辞書で調べてみると、夏の「土用」は立秋の前の十八日を言い、その間にある丑の日を「土用の丑の日」と言うのだそうだ。今年は七月二十四日が丑の日らしい。だがその日に鰻を食べて、一体どんな意味があるのだろうか。

確かに土用は暑い時期であり、夏バテ防止に鰻を食べるのは効果があるだろう。でも、ことさら「丑の日」に食べなくても効果はあるはずだ。私は春夏秋冬いつでも食べたい時に鰻を食べる。